

京都支部報

大図書館問題研究会京都支部

No. 11
1981.2.16.

〒606
左京区吉田本町
京大経済学部
図書室窓口
751-2111 (3412)

① 第2回研究集会ひらかれる
変りゆく大学図書館の理念

② 例会・研究会あしらせ

③ 府大図書館を考える

④ 情報コーナー

- ・京大における学術情報システムの在り方
- ・国立大学図書館関係予算案を公表

⑤ 資料紹介
1980年出版・図書関係図書

「読書人と書評」(2) 書評誌(約10冊)
京大・文部省図書室・藤原俊夫

次

2月例会

大学図書館の機械化の現状について

-国立大学図書館を中心に-

2月21日(土) 2-4時半

京大附屬図書館
會議室

① 第2回 研究集会 ひらかれる

昨年の計1回関西3支部合同の研究集会は森耕一氏をむかえ、「図書館の課題」について講演をさきました。それにづいて今年は、1月17日(土)日本生命中央島研修所で、関西大学教授、岩橋敏生氏をむかえ、大学図書館の諸問題について講演を聞きました。

講演の内容は、変りゆく大学図書館の理念について、イギリスやアメリカの例をふまえ、様々な考え方を紹介し、開架システム、学習図書館のあり方、組織の向題について述べたものです。

研究集会には、54名(京都20名、大阪19名、兵庫15)が参加し充実した半日を過しました。又、研究集会終了後、講師をはじめ、懇親会をひらきました。

講演内容の一節を紹介します。①日本は職員組織については、大きくなれています。館長が専門職の人でないのが、大学図書館の発展を致命的なものにしています。館長がJLAの会員でないから、JLAで決まったことが現場で実践されない。②昭和40年代より支部は集中化を原則としており、日本では何となく集中化がいいだとされていましたが、集中化は大学図書館を非常に巨大化し、そこから官僚的構造が強くなり、ますます図書館を使いにくいうものになっています。③分散化は資料の重複が多くなるというけれど、分散化から生じる重複は、これであります。今日、オンライン目録等の変化で、資料が分散されても、ビデオグラフィック、コントロールは簡単になっている。分散の価値をみなすべきだ。④組織構造の向題では、ピラミッド型は官僚化を強化し、図書館において、フロエーションと官僚制構造は矛盾する。それに対して、ネットレス型は、人文・社会・自然と各分野にわかれ、それとれ、主題分野に対する文献の知識をもった職員が配置される

S・D方式と同じ、Subject Divisional plan の考え方がとり入れられており、取扱い上・下はない。今後の大学図書館はこのネックレス型がいいのではないかという考え方ある。

その他に、学習図書館機能について、大学図書館建築について等が語られ、「近ごろ常識的に考えられてきたことがないなあされており、常識化している問題をうたがってみると必要があるのではないか」と述べられ、今後、私たちが、大学図書館の問題を考えるのに非常に参考になる内容でした。

印象深かったのは、「専門性と官僚制構造は矛盾する」といわれた事です。 なあ、岩猿先生の講演内容は、大学図書研究として何らかの型で、整理することを考えてます。

② 例会・研究会のおしらせ

2月例会 大学図書館の機械化の現状について

— 国立大学図書館を中心に —

2月21日(土) 2時-4時半 京大附属図書館
会議室

3月例会 行政資料の利用と収集

京都府立総合資料館の「とかしだ」を囲んで

3月28日(土) 予定

全国研究集会 4月25-26日(土・日) (京都)

「学審答申とその後」

■ 府立図書館を考える

1980年12月11日、府立大学で行われた研究会のレジメを紹介します。

I いくつかのデータ

図書館費	〈昭54〉	〈昭55〉	
図書館運営費	2,315	2,389	
図書整備費	9,000*	10,500	整備費 9,000 目録 1,500
図書館管理費	7,998	8,421	
生文センター費	371	371	
合 計	19,648	21,681	

図書整備費	〈図書館〉	〈学部〉	
図 書	5,039 (1801冊)	19,686 (4357冊)	24,725
内 和	4,210 (1064冊)	11,764 (3232冊)	15,964
訳 洋	829 (137冊)	7,931 (1125冊)	8,760
雑 誌	3,992 (296冊)		
合 計	9,031		28,717

1人当たり(昭和54年度)

	資 料 費 (円)		増加冊数(冊)		貸出冊数(冊)	
	京府大	公立大平均	京府大	公立大	京府大	公立大
学生	6,700 (20,600)	26,300	4.62	4.66	6.45	6.05
教員	66,500 (203,600)	239,700	45.67	42.50	2.44 (33.34)	27.01

	学生 1人当蔵書数	館員 1人当学生数	職員 1人当給与
府立大学	113冊	149人	
公立大学	102冊	146人	3,790千円
私立大学	30冊	345人	
合 計	50冊	262人	
府立大学	103冊	180人	4,220千円

(1979白書)

(1979白書)

(1979年度)

II 府大図書館について

1. 【資料費】今いくらあればよいのか

昭和54年の出版状況(和書) [出版年鑑1980年版による]

発行点数 27,177点 平均単価 2,483円 総額 67,480千円

関連分野 約10,000点 " 約2,500円 " 約25,000千円

2 【利用】 学生の利用

リクエスト制度の確立 貸出手続を一層簡便にする

開館時間の延長要求への対応

文献所在調査 復写依頼業務の増大

3 【施設】 利用(閲覧)スペースは一応の水準にある

収蔵スペース、情報検索機器のスペースが今後の問題

4 【資料の収集】 図書選択の方法に問題が多い

成文化された収集方針の確立 一定期間、組織的に対応する必要がある

5 【集中と分散】 学部図書館(室)の設置の要求

人事・目録等の集中 人員配置(増) 場所の確保

6 【図書館の自由】 基本方針の中にとり入れる

最近の事例: 「日本の特殊部落」 菊地山哉

「分県地図」1978

「同和図書コーナーの資料について」

「人類の知的遺産シリーズ 第74巻 トインビー」山本新

「児童精神医学と境界領域」

「現代用語の基礎知識」1978年版

【生活文化センター】 全学的再検討の時期

教員の自主性、運動に支えられる 研究経費の保障 テーマの設定

3 【職員】

流動性 官僚化の方向と専門化の方向

大学図書館経験の蓄積と専門職新人の確保 ラインとスタッフ

人 数 10 → 12人 必要な事業の拡大

自己研修

業 務 民主的省力化と新事業へのとりくみ

倫理綱領

五 大学図書館をめぐる特徴的なうごき

1 「今後における学術情報システムの在り方について」1980.1答申

2 学術情報センターシステム開発調査協力者会議

(1) 学術情報システム技術的検討部会(1980.5～1980.8 中間報告)

(2) 図書館システム部会(1980.9～)

3 「国立大学における図書館相互利用制度の整備について」

4 近畿地区国立大学のうごき 「京都大学における学術情報システムの在り方について」

5 京都府立大学の教育・研究に役立つ立場から、具体的な対応の検討にはいる必要がある

図 資料コーナー

「京大広報 No.209 1981.2.1」より

京都大学における学術情報システムの在り方

学術情報問題調査検討委員会
委員長 林 良平

本委員会は、総長の諮問を受け「京都大学における学術情報システムの在り方について」調査検討しておりましたが、中間答申としての結論を得て、昭和55年10月3日付で総長に中間答申をいたしました。以下はその要約であります。つきましては、これについてのご理解を得、かつご批判を賜わりたいと存じます。

京都大学における学術情報システムの
在り方について（中間答申）〔要約〕

昭和55年8月30日

はしがき

本委員会は、本学の図書館関係者、情報処理関係者および情報工学関係者によって構成され、全国的システムを目指す学術審議会の「今後における学術情報システムの在り方（答申）」をも踏まえて、京都大学の学術情報システムの在り方について審議を重ね、その確立が必要かつ有効であるとの共通の認識を得た。本報告書はその審議の結果をまとめたものであるが、問題の性質上、或る程度市のある内容になっており、今後、この具体化にあたっては、全学的な検討を待つものである。

1. 我が国の学術情報システムの動向

1-1 学術情報システムの目的と必要性

近年における学術研究の進歩発展はめざましく、これに伴って、世界の研究者の数も増加し、その研究によって生産される情報量も飛躍的に増

大し、その伝達媒体も多様化した。これらの中から研究者が、その研究に関する情報を的確に引き出すことはますます困難となってきている。

この問題を解決する方法として、各種の情報をデータベース化し、これを電算機によって検索する情報検索システムが開発され、これによって研究者が、必要な情報を広範囲に、迅速、的確に引き出すことが可能となった。このように学術情報をめぐる環境は急速に変化しつつあり、京都大学としても、学内の研究活動を支援するために全学的に調整された学術情報システムを確立することが必要となった。

1-2 学術審議会の答申と今後の展開

昭和55年1月、学術審議会から文部大臣に対して「今後における学術情報システムの在り方について（答申）」が答申された。

この答申の基本的な考え方は、資源共有の理念に基づき、既存の各大学等の諸機関において蓄積してきた各種の情報資源の有効な相互利用を前提とし、電算機と通信技術を駆使して各機関を結び、全国的なネットワークを構築することである。その基本的な方策は、①一次情報の収集・提供機能の充実、②情報検索システムの確立、③我が国固有のデータベースの形成の促進、となっている。①については、全国的な観点から組織的な収集整備を行うこととしている。②については、全国的な学術情報システムの中核となる機関としての全国的なセンターを設け、各機関との連絡・調整、計画、研究開発、集中すべきデータベースの管理・運営の機能を果す。このセンターを中心とする学術情報ネットワークの結節点（ノード）としては、七つの大型計算機センターほか幾つかの

共同利用機関等がこれにあたる。情報検索については、一般的な商業ベースのデータベースの管理・運用は全国的なセンターで行い、特定専門領域のデータベースの形成への便宜供与及びその管理・運用はノードが行う。図書目録については、機械可読目録(MARC)を基礎とするオンライン目録システムにより、各大学図書館に設置される端末機を通して、共同して分担目録作業を行う。これにより、全国的な一次資料の所在情報を形成し、図書館間の資料の相互利用を促進することが可能であるとしている。

以上のように学術情報流通に関する全国的規模のネットワークが構築されようとしており、各大学における学術情報の在り方も大きな変革を迫られるものと考えられる。

1-3 諸大学等の動向 一 省 略 一

2. 東京大学における学術情報システムの在り方

2-1 学術情報問題調査検討委員会での検討

本委員会は、総長の諮問機関として、昭和54年12月4日に発足した。以後、林附属図書館長を委員長に選出し、①目録情報・所在情報を中心とする図書館業務の機械化システム、②文献情報、数値情報、图形情報等のデータベースの形成・維持および情報検索システムの二点について審議を重ねた。さらにこれらを研究開発および維持するため、「京都大学学術情報システム研究開発センター(仮称)」の設置の必要性およびその具体的な在り方について検討を重ね、この中間報告書をまとめた。

2-2 京都大学学術情報システムの機能と構成について

2-2-1 大学における学術情報システムの性格

一般的に各種の情報を的確かつ効率的に利用者に提供するための条件として、①学術情報に関する必要な機能が有機的に結合し、一つの総合化されたシステムとして組み立てられること、②資源共有の考え方方に十分理解して構成すること、③学

術研究に取り組む研究者にとって最適をめざしたシステムであること、が必要である。

さらに京都大学の学術情報システムとしては、①京都大学の研究を支援するものであり、それ自身、統一的、総合的であること、②全国的な学術情報システムに整合し、そのサブシステムとしての役割と機能をも併せ持つこと、③システムの研究開発および運用・維持において中枢としての全国的なセンターと相補うものであること、が必要である。

2-2-2 対象となる学術情報

学術研究に必要な情報には、図書、雑誌論文等の一次情報があり、その取得・利用を容易にするために一次情報を加工・集約した目録・索引・抄録等の二次情報、さらに一次情報を総合・濃縮・再編成を行った総説レビュー誌等の三次情報がある。学術情報システムは、一応これらのすべてを対象と考えるものであるが、コンピュータ処理の対象としては、可能な緊急を要するものから次第にその範囲を拡大することになる。

2-2-3 システムの機能と構成

(1) 一次情報の収集・提供機能

学術審議会の答申の方針の下に、大学では図書、学術雑誌などの一次資料の組織的な収集を行い、これに伴うハウスキーピング業務のコンピュータ処理を行う。複写をはじめ、一次資料を直接利用者に提供する整備も必要である。

(2) 情報検索機能

全国的なセンターの各団 MARC のデータベースとの関係において本学に関する目録情報・所在情報の維持・管理を行い、その情報を全国的なセンターにも送る。また、京都大学が独自に形成する各種データベースおよびその他のデータベースを保有し、学内の研究者の利用に供するだけでなく、全国システムのネットワークを通して、全国的サービスも行う。

(3) データベースの形成とその維持・管理の機能

上記(2)のデータベースの形成に必要な設備を提供するためには主として大型計算機センターの協力を得なければならない。また、データベースは、一度形成されても常時変化し、成長していくものであり、その維持・管理に積極的な支援を行う。

(4) ネットワークによる情報流通機能

学内の図書館（室）、大型計算機センター、研究室などが具体的にどのように結ばれるかは今後の検討に待つが、これらがネットワークとして結合し、情報の流通サービスを行うと共に全国的ネットワークにも結合する。

2-3 学術情報システムの研究・開発、運用・維持の諸問題

このシステムは、全国的なセンターは勿論、学内の附属図書館、大型計算機センターをはじめとし、各方面が関与し、その連絡・調整が行われなければならず、その研究・開発および維持には高度の専門分野の知識と情報システムの技術を必要とし、その作業量も多い。したがって、このための専任の機関がぜひとも必要であり、それは全学の意見を反映させる組織をとらねばならない。

3. 京都大学学術情報システム研究開発センター

3-1 センターの目的と基本理念

本センターは、学内の関係諸機関が密接に連絡をとりながら、本学の学術情報システムの整備に關し、連絡・調整を行い、データベースを形成し、その維持・管理を支援しようとするもので、その主な目的は次のとおりである。

(a) 目録情報・所在情報のデータベースを形成する図書目録システムを研究・開発し、その維持・管理を支援する。それによって、図書目録のオンライン検索を可能にし、利用者に対するサービスを向上させ、さらにハウスキーピング業務等の機械化をはかり、図書館業務を効率化する。

(b) 学内における自然科学、人文・社会科学にわたる広い研究領域の学術研究上価値の高い独自性のあるデータベースを育成し、その維持・管理

を支援する。これは京都大学独自のデータベースのみならず、既成のデータベースのうち、特に京都大学に置く価値のあるものも含む。

(c) その他、学術情報システムに関する研究と技術開発を行い、その実用化をはかる。

3-2 センターの組織・構成

3-2-1 センターの位置付け

前述の諸目的を達成するためには、多くの人員と施設・設備を必要とし、その研究開発を強力に推進するためには、専任者を必要とする。同時に学内諸部局の情報処理関係者および附属図書館、大型計算機センター、情報処理教育センター等の情報処理機関の協力が必要である。また、このセンターの組織としては、専任者のほかに学内の各学問分野の研究者の協力による委員会活動を必要とするであろう。学内情報処理機関のうち、特に大型計算機センターは、主として科学計算のために強大な情報の処理能力および蓄積能力を有しているが、さらに上述の目的達成のための諸事情がゆるせば、これらの能力を充実することにより、学術情報データベース・システムのハードウェアについては、基本的にはこれに依拠することが適切である。また、これまで大型計算機センターにおいて既に推進されてきた各種データベースの研究・開発およびその基礎的研究の実績にかんがみ、この大型計算機センターの協力が必要であり、このためにはその人員および施設・設備の充実が前提となる。

大型計算機センターでは、その活動をさらに充実するために新たに研究部門の設置を計画しており、電算機システム自体の研究、科学計算に関する研究、画像情報・数値情報等に関する研究・開発を目指している。さらに、学術審議会の答申の全国的な学術情報システムのノードとしてデータベースの形成やその形成に便宜を供与するほか、特殊専門領域のデータベースの保管・運用の機能を果すことが期待されている。

これに対して本センターは、まず、本学におけるそれ以外の一次情報に到達するための手段とし

ての目録情報・所在情報およびその他の文献情報などの書誌情報全般を扱うものでなくてはならない。

本センターは、大型計算機センターの電算機システムに依拠して運営され、原則としてデータベース・システムの維持・管理を受けもつが、データの内容に関する維持・管理は関係する研究者および研究機関等の管轄となる。ただし、図書の受入、目録、貸出および雑誌等の業務を扱う図書館情報処理システムについては、科学計算を主体とする大型計算機センターの処理と著しく異なるので、附属図書館に専用の電算機システムを必要とし、その維持・管理は同館の管轄となる。また、専用の電算機を保有する部局についても同様のことといえる。

このようにして、本センターで開発された書誌情報に関するシステムは、それがどの電算機システムで運用されるとしても、学内の共同利用に供せられる可能性が生ずる。

3-2-2 センターの組織・構成（試案）

本センターは、全学の代表者から構成される協議委員会を最高決議機関とし、センター長はそれを受けて、運営委員会に諮って具体的に事業を実行する。この下に研究部門、開発部門、運用・維持部門の3部門を持ち、これに事務部が加わる。各部門は次の業務を行う。

Ⅰ 研究部門（常置）

①書誌情報処理研究部門 入力方法、各種語の文字処理、記憶方法、データ構造、データベースの結合、データ圧縮、出力方法、目録規則との関係等、書誌情報に関する基礎的研究を行う。

②書誌情報システム研究部門

上記の基礎的研究に立脚した具体的な書誌情報システムの研究を行う。

Ⅱ 開発部門－開発委員会

必要に応じて委員会を設置し、当初は次の開発を行う。

①一般学術情報データベース開発グループ

商業ベースの一般学術情報データベースのう

ち、特に京都大学に置くことが望ましいものの検索システム等の開発を行う。

②特殊学術情報データベース開発グループ

京都大学における特定分野の研究の過程で形成される書誌情報のデータベースの形成およびその検索システム等の開発を行う。

③図書館日常業務処理システム開発グループ

図書館の受入業務、貸出業務、雑誌業務の電算機処理システムを開発する。

④目録情報・所在情報データベース開発グループ

本学の目録情報・所在情報システムの開発を行う。

⑤書誌情報入力処理方式開発グループ

漢字および特殊文字等の効率的な入力方法を開発する。

⑥学内ネットワーク開発グループ

学内の各部局図書館（室）に設置される端末機を結ぶ効率的なネットワークを開発する。

Ⅲ 運用・維持部門（常置）

①書誌情報データベース運用・維持部門

開発された書誌情報システムを必要な場合実際に運用・維持し、その効率的な運用方式も開発する。

②学術情報システム普及活動部門

学内の書誌情報データベースの形成のための窓口となり、開発された書誌情報システムの利用に関してPR活動を行う。

③学術情報システム教育・訓練活動部門

開発された書誌情報システムの利用および維持・管理についての教育・訓練を行う。

上述の研究部門は、その本来の研究を進める一方、各分野の研究者等と共に開発委員会のメンバーとなり、その主導的な役割を果し、運用・維持部門も当初は開発に参加する。

3-2-3 地域内大学との関係

以上に述べたように本センターは、一応学内共同利用施設として位置付けたが、全国的な範囲での学術情報システムの開発活動の中の一環として、その地域的または事項別の役割分担をする共同利用施設とすることが望ましい。

学術情報問題調査検討委員会委員名簿

階層図書館長	○印委員長 林 良平
大型計算機センター長 情報処理教育センター長	舟羽義次 大野 雄
工学部教授	岸尾 真

工学部教授

数理解析研究所教授

大型計算機センター助教授

矢島繁三

一松 実

星野 勝

(中間答申の全文は、近刊の附属図書館報「静音」に掲載される予定です。)

文部省は、五十六年度の国立大学図書館関係予算案の主要事項をこのほど公表した。それによると、総額四十八億三千五十五万二千円で、対前年度比一億八千百十六万三千円増(伸び率三・九%)。緊縮財政のありを受け、低い伸び率にとどまつたものの、新たに外國雑誌センター業務経費が計上されたほか、電子計算機導入経費、学術情報センターシステム開発調査費、外國雑誌購入費などの増額が図られた。

予算案総額四十八億三千五十五万二千円のうち、図書館経費は十六億九千四百九十二万一千円。対前年度比一億五千四百六十八万八千円増。伸び率は一〇%。内訳は図書雑誌購入費十二億三千二十八万一千円(七・三%増)、図書館業務合理化経費九千五百九十四万円(七五・五%増)、図書館特別業務経費二千百十七万六千円(二〇四・一%増)、学術情報センターシステム開発調査費一千四百十六万八千円(二六六・四%増)、情報検索端末経費二百五十三万七千円、マイクロフィルム撮影等経費三億二千八十一万九千円は前年度と同額となつた。

図書館業務合理化経費では名古屋大と九州工業大の両図書館に六千六百五十一万六千円の経費で新たに電算機を導入することになつておあり、また、図書館特別業務経費の大額な伸びは新規施設として外國雑誌センター業務経費(ハート機販経費、製本費など千二十一万六千円)が計上されたことによるもの。

一方、図書館設備費は前年度とほとんど変わらず二千六百四十七万五千円増の三十一億三千五百六十三万一千円にとどまつた。内訳は図書購入費三十九億四千三百二十八万九千円、学生用図書購入費十九億六千二十一万八千円、参考図書購入費七千六十六一万五千円、特別図書購入費二千五百一萬八千円、外國雑誌等購入費七億一千三百三十六万七千円、新設大図書購入費一億六千三百四万一千円、近代化設備費九千二百三十九万二千円、業務機械化装置設備費三千七百八十三万円、筑波大、図書情報大近代化設備費三千二百五十七万二千円、二千九百九十四万円。来年度は千葉大と奈良教育大に電動式書架、高知医大にブックティクショニン装置、豊橋技大にマイクロ撮影装置が設置され、また、外國雑誌購入費が四億一千三百三十六万七千円と五%アップされる。

⑤ 資料紹介

1980年に出版された図書関係図書

図書館の自由

- ・図書館法研究—図書館法制定30周年記念図書館法研究シンポジウム記録 日図協
- ・図書館の自由に関する宣言・20年の歩み 日図協
- ・図書館の自由と検閲—あなたはどう考えるか A・アンダーソン著 榎野重雄監訳 日図協

図書館学

- ・図書館社会学 カールリュテット著 加藤一英・河井弘志訳
- ・田中敬の著作集「祐葉巻」『知漢書目録法』 早川書房
- ・鶴藤利夫 田中隆子・文山泰通編 日図協
- ・中田邦造 横井重雄編 日図協
- ・弥吉光長著作集「江戸時代の出版どん」 日外アソシエーツ
- ・蒲地正夫選集 同刊行会

参考叢書

- ・参考叢書 「図書館学叢書資料集成 第1巻」 伊藤木公彦著 白石書店
- ・日本の参考図書・解説総覧 日図協
- ・天理図書館善本稀書 反町恭雄著 八木書店
- ・大室社一文庫索引目録 大室文庫
- ・国立国会図書館の児童書—グリムの翻訳年表・明治期のアンデルセンについて他 石川春江著

- ・日本の図書館 1980 日図協
- ・全国大学図書館要覧 日本学術出版社編
- ・全国移動図書館基礎調査一覧 国協公共部会編

図書館史関係著作

- ・図書館白書—戦後35年の公共図書館の歩み 日図協
- ・図書館 その本質・歴史と思潮 関田温
- ・図書館史漫説 フォルジュティウス・ヨースト共著 日外アソシエーツ
- ・図書館の時代 石見尚著 論創社
- ・注賞の図書館 平田守衛著・発行
- ・図書館の由来記 須本一大著 中央公論美術出版社
- ・福島県立図書館50年史 同館
- ・国立国会図書館30年史
- ・公共図書館とともにくらして 日本子ども文庫研究会
- ・松庵人生雜錄 江集文男著

80年代の課題

- ・公共図書館サービスのネットワークに関する調査報告書 文部省
社会教育課
- ・図書館全国計画のための基礎資料集2 全国公共図書館協議会
- ・アメリカにおける州の図書館版権行政 ジョン・A・マクロッサン
編 全国公共図書館協議会
- ・東京の図書館はなれど 国内研東京支部
- ・図書館と司書制度に関するアンケート結果の概要 国内研東京支部
- ・図説・図書館のすべて 国内研著 ほるぷ総合

書評誌(紙)の命運 (京大文) 藤原俊夫

書評ジャーナリズムの育成などと讀者の良いこととあつて、13年に、数少
い書評誌(紙)の経営が危機に入っているらしい。す「本と批評」が、一
月から休刊、「50冊の本」も販売は、火の車で沈没寸前という危機であ
る。「本と批評」は、もともと「エディター」という読名で'74年4月に創刊
され、主として書店・出版関係者によく読まれて来た。それが'79年5月に
読名を「本と批評」に改め、一般読書人をも対象とした、より広範な読者層
向けの専門書評誌に変更して2年足らずで今後の運営を終らなければである。

「50冊の本」は、'78年5月に創刊され、3年足らずの間に何處か経営上の危
機を迎えている。最初創刊の牛込モトリヤリヤタケシが経営基盤のもうい書評誌
の危機打開策に格別の名手であるは可もなく、八月の編集部の組織改編入
的せ努力に負う他の方法はないのである。しかし、個人の体力と歴力には限
度があり、「50冊の本」の編集者、千家和彦は、編集後記の中で、折々、本
の裏とも、どうともつかぬくりごとを並べて多岐に亘りていて。万葉づ
きに、「50冊の本」の系統と題するファンの中から、年間一百冊の講評料を
取り、招待会員を募集すること、編集部を行ひ始め、戦政的基盤を
作りとつける機運がなされた。これが成功するか否かはまだ分らぬ。

椎名誠のユニークな面づくりで知られる「本と批評」は今と二十三年
里上守つて健やしく生き、移り気な易筋とまるで讀者層と一体化した上、
これもいつまで続かずかの保障限りではない。いまれにしても書評誌の長期
は中止の定期刊行か、今も昔も、大量な困難を作ることには畢竟である。

書評誌の編集者は多くして、報酬があることなく、書籍出版社も又、ただ販
売の原稿料に甘んじなければならぬ。何處か叶えう經營上の危機の中に
、この書評誌の火灯がへどりと消えてゆく。

書物上廻り本が現れ、古物=廻り本が現れ、読書・讀者論と廻り本
が現れてこそ傳で、書評論(紙)は、廻り本の傍に立つかからず、古物の傍
に立つて休む日を(廻り本)はなまざす。

この原因をどうにかするべきであるところ。

ひとつには、讀者からいへば(1)「さかうだ」を教えられる。読みには
讀者の要求する本を達して(1)からると考へらる。これには、書評論
の内容が本質的でないと、うなづきも傳せられることはなかろう。例を以て、書評
をたんに讀者・知識人の自己負担、したんとつくる知識の推進、いや、
あとは、善意の押しきりといひ思はれぬ讀者が増加すれば、如何
なるであつてとしも、書評論の存在し得る根柢は失なわれてしまう。

優れた讀書人が、自分の即実写墨と書評論と反映させることで、書評論
の内容を高め、優れた書評論の存在か、良き讀書人を育てるといつて相成る
條が書の方向へ着目すれば、理窟的には、書評論の本筋は可能であり、そ
の背後、ある立場も陸續に向かうはずなのだ。しかし、理窟は、書物上廻
り本は現れても、書評論の先本ゆきはかんばしいものではない。

専門誌と(1)の書評論の「消長と多様化と」を行つて視点がうつると
かくしも悲觀的にはかりとらえし心象は必ずしも知れぬ手。一例をあげれば、週刊新・月刊総合推進、日本青年の書評本筋の充実である。朝日・毎日・読者
新報の書評欄は、(1)今読み易く洗練されて居し。但し朝日、サンデー等
等の新聞社系、(2)刊行は無説、週刊現代、週刊ホーリ等の、(3)は
純粹な技術本筋流れて居る。何外か、その中の特長を生かした書
評欄づくりに工夫をこらして居ることは、ナレ、注意して読めばよくわかる
ことである。特に(1)讀書人を想定してPBり、週刊新・月刊総合の書評欄
に目を通すことで、ひととおりの書物に廻る情報を得られるのだ。そして
の確測ができると可れど、書評論の先本ゆきは、全く明示されぬもの。

大図研・京大班 3月例会案内

大図研京大班の日常活動を定着させるために、
月1回の例会で、しばらく、新着の主として、英米の
図書館雑誌の中からめほしい記事をひきて、読
んだり、抄録を作ったりすることを始めたいと思
います。

細かい点については、3月の例会で、具体的に話し合
って、決めたいと思いますが、オノ回は取りあえず
Library Quarterly の下記論文を取りあげたく思いますので、
できだけ読んでおいて下さい。

コピーについては、少部数ありますので、篠原(文)まで
お問い合わせ下さい。

○とき 3月7日(土) P.M. 1:30 - 4:00

○場所 系統学部図書室

○取りあげる記事

Karl J. Weintraub: The humanistic scholar and the library.
[Library Quarterly, vol.50, no.1, pp.22-39.]

大岡研京大班 4月例会

案 内

前回読み残した論文の残り半分を読みますか、忠実に記すというより、内容にとくして、あるいは内容にとらわれず、自由に討論することに重点をおきたいと思います。したがって暇のない方は、読んでいないうちがまいませんから気楽に参加してください。

日時 4月4日(土)

場所 P.M. 1:30 - 4:00

経済・図書室(油壺)

論文

Karl J. Weintraub

The humanistic scholar and the Library
(Library quarterly, vol.50, no.1, pp.22-39)

大図研・京大班おしゃせ

1981.4.28(火)

研究集会が"終ったは"かりて"スマバ"テ氣味のうえ
連休前で何かと忙しい日まで"すが", 例会は
予定通り行いたいと思います。

今回 取りあけ"る論文は特に面白いと"う評
て"す"、 多数ご参加下さい。

記

日時 5月2日(土) P.M. 1:30-4:00

場所 経済学部(図書) 寄覧室

論文 Garfield, Eugene: Is information retrieval in the arts and
humanities inherently different from that in science?
The effect that ISI's citation index for the arts and
humanities is expected to have on future scholarship.
(Library quarterly, vol.50, no.1, pp. 40-57)

報告者 ウィルス研図書室
堤 美智子

追伸

6月18日会は少く趣向を変えて「みんなの
京都府立図書館・社会教育センターを作った会」
の余念会への参加をもって、例会に変えたりと
思います。今のところ 6月6日(土) P.M. 1:30-4:00
社会教育センターにおいて開催の予定です。